



# 奨学生はすでに770人 母の意志活かした「育英会」

ひぐちグループ  
三宝商事(株)、(株)ひぐち

長崎でホール21店舗を展開している「ひぐちグループ」(三宝商事株式会社、株式会社ひぐち)の樋口謙之助会長は、「樋口ミツ奨育英会」を設立し、

26年にわたり苦学生たちの支援を続けています。樋口代表は、

母親のミツさんの「もうけはほどほどに、事業でお世話になった人たちへの感謝を忘れてはいけない」という口癖

高等学校や大学に進学が困難な青年に、学資を貸与して修学を援助し、将来社会に貢献出来る有為な人材の育成を図る」となっています。

奨学金は高校生に月額2万円、大学生・専門校生に同4万円となっていて、貸与された奨学金は無利子で、それぞれ卒業後2年間の猶予期間を経た後、貸与年数の3倍の年数で割賦返済する形です。大学生であれば12年で返済することになるわけです。創立以来、奨学金を受けた奨学生は770人(平成21年4月)にのぼっており、現在86人が支援を受けているそうです。奨学金の貸与残高は3億6200万円、年間貸与額は4000万円余でほぼ同額が返還されています。

上げました。ですから事業目的は「心身ともに健全で優れた資質を有しているにもかかわらず、経済的理由で

奨学生の選考は、中・高校長の推薦を受けた長崎県内の在学生を財団の「奨学生選考委員会」が決定する仕組みです。面接は同グループ本社の会議室で、通常、理事が評議員、事務局役員、事務局長の3人が行います。ここでは本人のほか保護者が同席するのが決まりで、父親や母親時には両親がそろって出席することもあります。その結果、毎年、高校生3人程度、大学生・専門校生18人ほどがそれぞれ奨学生に採用されて



奨学生希望者の面接をする副島昭育英会理事(右)

いきます。選考の基準については、健康で向上心を持っていることはもちろんですが、知育・体育・徳育に優れ、何かをやりとげている学生、そして感謝の心を持っている学生などにウェイトを置いています。以前、身体障害のハンデを背負いながらも随筆などの能力に長け、県の文芸コンクールで最優秀賞をとるなどの活躍をしていた学生は、ハンデを「特徴」とし「その特徴を活かして将来地域社会の役に立ちたい」と応募し

てきました。選考委員たちは「むしろここへ来てくれてありがとう。ぜひ応援したい」と言ったところ、同伴した母と共に泣いて喜んだそうです。大学生の場合、国公立と私立の割合はほぼ半数、東大、九州大、熊本大、長崎大、東京音大など多彩で、ここ数年は医療、看護、福祉専門校生が増える傾向にあるそうです。男女の比率では5〜6年前より女性の増加が目立ち、現在は男女ほぼ同率で、年によっては女性の方が多いこともあると言います。

奨学生たちの就職先は長崎県内が5割、その他の九州地区3割で、九州以外が2割で、医師、教諭、公務員、金融機関など各分野で活躍しています。ホールのほか飲食事業、オーディオビジュアル事業なども展開している「ひぐちグループ」で働く人も出てきていて、ホールの店長やリーダーを務めるなど人材が育っているといえます。こうして地味ながら着実に成果を挙げているこの活動に、奨学生の親たちからお礼の電話がかかってくるなど感謝の気持ちも寄せられています。江戸時代から世界に門戸が開かれていた長崎の地で始められた勉学への支援活動は息長く続いて行きそうです。